

スピノザ『エチカ』における自己充足の三つの相

笠松 和也

近世の感情論は、一般に「愛(amor)」の分析に重点が置かれている。例えば、16世紀のモラリストであるピエール・シャロンは『知恵について(De la Sagesse)』第1巻で、善に関わる諸情念のうちの第一のものを「愛」と位置づけ、欲望や喜びを愛の種類とみなしている。デカルトも『情念論』で「愛」を原初的情念の一つに数え入れているし、1647年2月1日付のシャニュ宛書簡では、愛の本性と区分、神への愛の諸特質を主題にしている。また、17世紀オランダのデカルト主義者であるアーノルト・フーリンクス(Arnold Geulincx)は、主著『エチカ』第一論文で、「徳」を「正しい理性への唯一の愛(amor unicus)」と定義し、徳一般を論じるにあたって、愛の本性と区分の議論から始めている。それぞれの思想家が異なる仕方ではあるが、道徳を論じる局面で「愛」の分析を中心課題としている。

本稿が扱うスピノザの主著『エチカ』でも、「愛」の分析は重要な位置を占める。とりわけ「神への愛」は『エチカ』第5部後半の主題である。だが、それと同時に、デカルト『情念論』ラテン語訳から受け継いだ「自己充足(acquiescentia in se ipso)」¹という感情にも、同じくらい重要な役割を与えている点を見逃してはならない。この感情は『エチカ』においては「自己愛(amor sui または philautia)」とも言い換えられるが、17世紀オランダのアウグスティヌス主義の影響下で、この感情に重点を置くのはいかにも奇妙である。実際、フーリンクスは『エチカ』第一論文において、自己を見つめ直し、自己の価値を切り下げること、自己愛を捨てて神への愛に至る道りを描いている。ところが、スピノザが『エチカ』第5部で論じる「神への愛」は、それとは対照的に自己充足を根拠に論証される。デカルト自身が『情念論』であまり展開することがなかった「自己充足」の議論を、デカルトの意図を超えて、スピノザは独自に位置づけ直しているのである。

いったいスピノザのいう「自己充足」とは何なのだろうか。『エチカ』の記述によれば、「自己充足」は一般に「原因として自己の観念を伴った喜び」(E3P51S)と言われる。「自己の観念を伴った」という表現から推察できるとおり、この感情には何らかの自己知が含まれている。本稿では、『エチカ』第2部と第3部を中心にしながら、自己充足に含まれる自己知の三つの相を明らかにする。

1. 自己知の構造

まずは、『エチカ』において自己知がどのように規定されるのかを概観しておきたい。スピノザ自身が『エチカ』第2部定理19-29の議論を要約した箇所から引用する。

精神は身体の変状の観念を知得するかぎりにおいてのみ、自己自身を認識する(この部の定理23より)。また、[精神は]身体の変状の観念によってのみ、自己の身体を知得し(この部の定理19より)、さらに身体の変状の観念によってのみ、外的物体を知得する(この部の定理26より)。したがって、[精神は]身体の変状の観念をもつかぎりにおいて、自己自身についても(この部の定理29より)、自己の身体についても(この部の定理27より)、外的物体についても(この部の定理25より)、十全な認識をもたず、単に(この部の定理28およびその備考より)毀損し錯雑した認識のみをもつ。(E2P29C)

ここでは、自己自身の認識、自己の身体の認識、外的物体の認識の三つが同じ水準で語られている。人間精神は、自己自身も自己の身体も外的物体も、自己の身体が外的物体から刺激を受けた時のある状態(身体の変状)の観念によってのみ、認識することができる。この点では三つの認識は共通している。そして、その構造ゆえに、人間精神はこれら三つについて非十全な認識しかもたない。なぜなら、自己の身体の変状のうちには、自己の身体と外的物体の両方の本性が混在しており、両者を截然と分けることができないからである。身体の変状の観念を介した認識においては、人間精神は自己の身体の認識と外的物体の認識を判明に区別することができない。また、思惟の属性の下で見れば、人間精神は自己自身と外的物体の観念についての認識を判明に区別することができない²。その意味で、自己知は外的物体の知に対して特権性をもつわけではない。

しかし、だからといって自己知と外的物体の知が同じ地位にあるわけではない。なぜなら、人間精神が自己の身体に対してもつ関係は、外的物体に対してもつ関係とは異なる規定をもっているからである。「人間精神を構成する観念の対象は身体である」(E2P13D)、あるいはより端的にいうなら、人間精神は「人間身体の観念(idea humani corporis)」(E2P13S)である。先の引用箇所と合わせると、人間精神は人間身体の観念でありながら、人間身体の観念を非十全にしかもたないことになる。自己知と外的物体の知が異なるのは、この点においてである。

人間精神のこの規定は、一見矛盾しているように思える。だが、ゲルーが指摘するとおり、ここでは「人間身体の観念であること (esse idea)」と「人間身体の観念をもつこと (habere ideam)」を区別する必要がある。ゲルーによれば、人間精神が「人間身体の観念であること」は、神において考えられた人間精神の本性そのものを表している。それは、神が人間身体についてもつ観念と一致する。他方、人間精神が「人間身体の観念をもつこと」は、神における人間精神の本性そのものを表すのではなく、単に精神が自己の身体の変状を知得することを通して自己について認識することを示すにすぎない。人間精神は神と同様の仕方では自己の身体を認識するわけではないため、人間精神がもつ人間身体の観念は、神がもつ人間身体の観念とは完全には一致しない。この二重性によって、人間精神は人間身体の観念でありながら、人間身体の観念を非十全にしきもたないとされる³。

ゲルーの解釈は、神と人間精神の関係から、「人間身体の観念であること」と「人間身体の観念をもつこと」の差異を説明するものとして妥当であるが、ここではさらに人間精神がもつ自己知の構造を明らかにするため、人間精神を構成する観念がもつ三つの性格に焦点を当てて、整理し直してみたい。

(a) 人間身体が観念の対象であること。人間精神を構成する観念の対象が人間身体であるからといって、人間精神が人間身体しか認識しないわけではない。人間精神は非十全ではあるが外的物体の観念をもつ。ならば、外的物体は人間精神の対象とはいえないのだろうか。『エチカ』における「対象 (objectum)」という語の用法を見るかぎり、二次的には外的物体を人間精神の対象と言うことはできる⁴。ただし、ここで「人間精神の対象が人間身体である」と言われるのは、人間精神が人間身体であれ外的物体であれ、人間身体の変状の観念を通して間接的にしか、それらの観念をもたないことを意味する。「人間身体の変状の観念を通して」という点で、外的物体の観念をもつ場合であっても、人間精神は第一に人間身体を対象としている。

(b) 観念どうしが因果関係をもつこと。諸事物における原因と結果の系列は、思惟の属性から見れば、ある観念が他の観念を産出する系列と同じものである⁵。人間身体の変状は、人間身体が外的物体から刺激を受けた時に生じるある状態であるから、観念の系列からいえば、人間身体の観念と外的物体の観念は人間身体の変状の観念を産出する原因である。しかも、それらはそれぞれ「非十全な原因 (causa inadaequata)」である⁶。なぜなら、人間身体の観念も、外的物体の観念も、それ単独で人間身体の変状の観念を産出する原因ではないからである。人間精神が人間身体の変状の観念を通して人間身体の観念をもつことは、人間身体の観念

と人間身体の変状の観念が、非十全にではあれ、原因と結果の関係にあることを示している。

(c) 観念それ自体が活動性をもつこと。ある観念が他の観念を産出するのは、神の活動性ないし力能の現れである。ところが、有限な諸事物においては、外的物体との関係の下でこの活動性が制限される。『エチカ』第3部以降では、この制限された活動性は、「自己の存在を保持しようとするコナトゥス (conatus)」と呼ばれる。観念は十全であれ非十全であれ、それぞれコナトゥスをもっている⁷。そして、人間精神は、自己の身体と外的原因との関係をどのように認識するかによって、自己の活動性をより大きく捉えたり、より小さく捉えたりする。これが「感情 (affectus)」として表象される。自己の活動性をより大きく捉える場合、自己の身体の変状とその観念は「喜び (laetitia)」と呼ばれ、反対により小さく捉える場合、「悲しみ (tristitia)」と呼ばれる⁸。

人間精神がもつ自己知の構造には、以上の三つの性格が備わっている。このことを踏まえた上で、次に自己知がどのように自己充足に関わるのかを見ていくことにしたい。

2. 自己充足の定義における諸問題

「自己充足」という感情が重要であることは、スピノザ研究において共通認識になっていると思われる。だが、自己充足を主題とした研究自体はほとんど見られない。例外的にラザフォードとトタロの研究があるが⁹、これらは第二種認識(理性による認識)から生じる自己充足と、第三種認識(直観による認識)から生じる自己充足の差異を解明することを中心課題としており、自己充足という感情を総体として扱うものではない。そのため、表象 (imaginatio) から生じる受動的な自己充足であれ、理性や直観から生じる能動的な自己充足であれ、同一の定義が参照されることの意味を見逃しているように思われる。われわれはそれゆえ、自己充足そのものの定義から出発することにしたい。

『エチカ』における自己充足の定義は、大きく分けて2通りある。一つは、「内的原因の観念を伴った喜び」(E3P30S) ないし「原因として自己の観念を伴った喜び」(E3P51S) という定義である。「自己充足」という語が最初に登場する第3部定理 30 備考では、「内的原因の観念を伴った喜び」としての「自己充足」が、「外的原因の観念を伴った喜び」としての「愛 (amor)」と対比的に位置づけられている。また、それらの反対感情である、「内的原因の観念を伴った悲しみ」と

しての「後悔 (poenitentia)」と「外的原因の観念を伴った悲しみ」としての「憎しみ (odium)」にも対応が認められる¹⁰。前節で確認した自己知の構造からいうと、感情として人間身体の変状が、外的物体とともに認識されるならば、「愛」や「憎しみ」と呼ばれ、自己の身体とともに認識されるならば、「自己充足」や「後悔」と呼ばれることになる。四つの感情の配置は、自己知の構造と合致している。

もう一つの定義は、第3部定理55備考に見られる。「われわれの弱さの観念を伴ったこの悲しみは、謙遜 (humilitas) と呼ばれる。他方、われわれを観想することから生じる喜びは、自己愛 (philautia) ないし自己充足と称される」。この定義は、第3部「諸感情の定義」でも反復される。「自己充足とは、人間が自己自身や自己の活動力能を観想することから生じる喜びである」「謙遜とは、人間が自己の無力能ないし弱さを観想することから生じる悲しみである」(E3AD25, AD26)。

自己充足はなぜ2通りに定義されるのだろうか。第3部「諸感情の定義」では自己充足と謙遜の定義に以下の説明が加えられている。

自己充足は、われわれが自己の活動力能を観想することから生じる喜びであるとわれわれが知解するかぎりにおいて、謙遜と対立する。だが、自己充足はまた、われわれが精神の自由な決意にしたがって為したと信じる何らかの行為の観念を伴った喜びであるとわれわれが知解するかぎりにおいては、後悔と対立する。(E3AD26Ex)

ここでは、「観想 (contemplatio)」と「行為 (factum)」という二つの相が区別されている。「観想」という相から見れば、自己充足は「われわれが自己の活動力能を観想することから生じる喜び」と定義され、謙遜と対立する。これは、第3部定理55備考の定義と対応している。他方、「行為」という相から見れば、自己充足は「われわれが精神の自由な決意にしたがって為したと信じる何らかの行為の観念を伴った喜び」と定義され、後悔と対立する。これが、第3部定理30備考および定理51備考の定義と対応している。

自己知と自己充足の関係を論じるわれわれは、それゆえ次に自己知が自己充足のこれら二つの相とどのように関わるのかを明らかにしなければならない。

3. 表象と自己充足

「観想」と「行為」は両者とも、まずは表象の次元で考えられる。これらから

生じる自己充足は受動的であり、しばしば過度になって「高慢 (superbia)」に陥る。行為から生じる自己充足と、観想から生じる自己充足を順に見ていきたい。

3. 1 行為から生じる自己充足

『エチカ』では、「行為」は「自分が誰かに対して何らかのことをする」という構図をとる。これは表象において捉えられるものであり、理性によって捉えられる「活動 (actio)」とは異なる。自己充足が生じる行為として、スピノザは「自分が自分と似た他の人々を喜ばせる」¹¹と表象する行為を挙げている。「ある人が他の人々を喜ばせると表象する何かをすることしたならば、その人は原因として自己の観念を伴った喜びを感じるだろう。あるいは、自己自身を喜びとともに観想するであろう」(E3P30)。ここでいう「喜び」こそが「自己充足」である。

人はなぜ自分と似た誰かが喜ぶと、自らも喜ぶのだろうか。いわゆる「感情の模倣 (affectuum imitatio)」と呼ばれる規則は、第3部定理27で証明される。証明の要となるのは、次の箇所である。

もし外的物体の本性がわれわれの身体の本性と似ている (similis) ならば、われわれが表象する外的物体の観念は、外的物体の変状と似たわれわれの身体の変状を含むであろう。したがって、もしわれわれと似た誰かが何らかの感情を感じるのをわれわれが表象するならば、この表象はこの感情と似たわれわれの身体の変状を表現するであろう。(E3P27D)

本稿の第1節で確認したとおり、人間精神は人間身体の変状の観念を通して、外的物体の観念と人間身体の本性の両方が含まれているからである。これを外的物体の側から見れば、外的物体の変状のうちにもこれら両方の本性が含まれているはずである。もちろん、「われわれが外的物体についてもつ観念は、外的物体の本性よりも、われわれの身体の状態を多く示す」(E2P16C2)と言われるように、これら二つの変状における本性の含まれ方は異なる。人間身体の変状は人間身体の本性をより多く示すし、外的物体の変状は外的物体の本性をより多く示す。さもなければ、あらゆる身体 [=物体] の変状が同じものになってしまう。

さて、ここで外的物体の本性と人間身体の本性が似ているとしたら、どうなるだろうか。両方の本性をともに含む人間身体の変状と外的物体の変状も、似たものになるはずである。両方の本性が似ているならば、本性の含まれ方が異なると

しても、二つの変状は似たものを示すことになるからである。それゆえ、われわれと似た誰かが喜びとしての身体の変状をもつとわれわれが表象すると、われわれもそれと似た喜びとしての身体の変状をもつことになる。この時、われわれと似た誰かが喜びの原因が、われわれの何らかの行為であるならば、感情の模倣によってわれわれを感じる「喜び」は、第3部定理30でいわれる「自己充足」となる。

スピノザ自身は、行為から生じる自己充足について、感情の模倣に関わる場合しか言及しないが、次の三つの場合も同様に、自己充足が生じると考えられる。

(i) 自分が愛するものを自分が喜ばせる場合。「自分の愛する人が喜びや悲しみを感じるのを表象する人は、同様に喜びや悲しみを感じるであろう」(E3P21)。このうち、他者が自分の愛する人を喜ばせる場合、自分が同様に感じる喜びは「好意 (favor)」と呼ばれる (E3P22S)。他方、自分が自らの愛する人を喜ばせる場合は書かれていないが、その時の喜びは自己の行為の観念を伴った喜びであるため、「自己充足」といえる。

(ii) 自分が憎むものを自分が悲しませる場合。「自分の憎む人が悲しみを感じるのを表象する人は喜ぶであろう」(E3P23)。自己の行為という限定が付かなければ、この喜びは「妬み (invidia)」と呼ばれる (E3P24S)。他方、自分が自らの憎む人を悲しませる場合に自ら感じる喜びは、自己の行為から生じる喜びであるため、これもまた「自己充足」といえる。

(iii) 自分が過去に何らかのことをした相手から喜ばされる場合。自分の過去の行為が原因となって、他の人々が自分に喜びを与える場合、その喜びは自己の行為によって生じるといえるため、これも「自己充足」である¹²。なお、このうち他人から賞賛された時に感じる喜びは「名誉 (gloria)」と呼ばれる。「名誉とは、他の人たちが賞賛するとわれわれが表象する、われわれの何らかの行為の観念を伴った喜びである」(E3AD30)。

それゆえ、行為から生じる自己充足は、『エチカ』で述べられている以上に、広がりをもった感情だと言うことができる。とりわけ、政治論的な場面を考えた場合には、上記の区分は重要であろう。

ただし、前節で見た自己充足の定義には「精神の自由な決意にしたがって」という限定があった点を付言しておきたい。精神が自己充足を感じるには、自らが自由な決意によって何らかの行為をしたと表象していなければならないのである。そのため、他者から強制されて自らが行為をした結果として喜びを感じるとしても、その喜びは「自己充足」とはいえないことになる¹³。

3. 2 観想から生じる自己充足

次に、「われわれが自己の活動力能を観想することから生じる喜び」としての自己充足が、どのように自己知と関係しているのかを見ていきたい。自己の観想から生じる自己充足は、第3部定理53で証明される。

定理53 精神は、自己自身と自己の活動力能を観想する時に喜ぶ。また、自己と自己の活動力能をより判明に表象すればするほど、よりいっそう喜ぶ。

証明 [a] 人間は自己の身体の変状とその観念によってのみ、自己自身を認識する(第2部定理19および定理23より)。
[b] ゆえに、精神が自己自身を観想しうるということが起こるならば、そのことから精神はより大きな完全性へと移行する。
[c] つまり、(この部の定理11備考より)喜びを感じると想定される。
[d] そして、精神は自己と自己の活動力能をより判明に表象しうるほど、より大きな喜びを感じると想定される。Q. E. D.

([a] ~ [d] の記号は引用者による)

ここでいう「観想する (*contemplari*)」は、古代や中世の神学で用いられる術語とは違って、「表象する (*imaginari*)」とほぼ同義である。実際、第3部定理30においても、「自己自身を喜びとともに観想するであろう」という表現が見られる。だが、定理30における「観想」と、ここでいう「観想」は、水準が異なっていることにも注意しておきたい。なぜなら、ここでは、自己の行為の観念を伴うことなく、自己を表象することだけから、自己充足が生じているからである。

証明の要となっているのは、[a] から [b] への移行である。[b] の初めで、なぜ「ゆえに (*ergo*)」と言えるのかが問題となる。というのも、突然ここで自己知それ自体が喜びを生じさせると言っているからである。第3部定理53以前に、それを証明している定理は存在しない。

証明のこの箇所を解釈するにあたって、マトゥロンは人間身体の変状がもつ錯雑さ (*confusion*) に度合いがあると考える (Matheron 1969, 214-5)。人間身体の変状は、人間身体のみによって規定されるのではなく、常に外的物体との関係の下で規定される。そのため、人間身体の変状は人間身体の「最適な水準 (*niveau optimum*)」に近づいたり遠ざかったりする。人間身体の変状がこの水準に近づく場合、人間精神の「受動性 (*passivité*)」は減少し、より大きな完全性へと移行することで喜びを感じる。他方、この水準から遠ざかる場合、人間精神の「受動性」は増大し、より小さな完全性へと移行して悲しみを感じる。平行論により、観念

の系列から考えても、同様のことがいえる。精神が自らを観想する時、精神は人間身体の変状の観念のうちに、自己自身 [=人間身体の観念] を見いだすため、その変状の観念は最適な水準へと近づき、人間精神は喜びを感じることになる。

第3部定理53において「より判明に (*distinctius*)」という比較級が使われていることから、人間身体の変状に錯雑さの度合いを考える点は妥当であろう。だが、マトゥロンの解釈には二つの疑問が残る。

一つは、「最適な水準」とは何なのかという点である。表象による認識では、人間精神は人間身体の変状の観念から出発して、人間身体の観念や外的物体の観念をもつに至る。人間精神が人間身体に関してあらかじめ何らかの基準をもっているとは考えられない。マトゥロン自身もこの「最適な水準」の身分については明確な説明を与えていない。

もう一つは、増減する「受動性」というものを想定する点である。第3部定理53で証明される「喜び」は、この定理の系で「他人から賞賛された時に感じる喜び」が挙げられている点からいって、受動的な喜びが念頭に置かれているはずである。そのため、マトゥロンの説明が正しいとするならば、「人間精神は自己を観想することによって、受動性を減少させることで、受動的な喜びを享受する」という奇妙な説明をしなければならなくなる¹⁴。

これに対して、マシュレは第3部定理53の注釈で、[a] から [b] への移行を問題にしないものの、重要な指摘をしている (Macherey, III, 332-4)。マシュレが着目するのは、定理53証明で用いられる「想定される (*supponitur*)」という表現である。この表現に対して、定理の文では「喜ぶ」を意味する動詞 *laetatur* が直接法現在で使われている。このことから、マシュレはこの定理には「現実的 (*réel*)」と「想像的 (*imaginaire*)」という対が見られると解釈する。「精神が感じる喜びは完全に現実的なものであるが、その喜びの基礎は、精神が自らについてもつ意識から生じるため、想定されたもの、つまり想像的なものである」 (Ibid, 334)。

マシュレによる現実的／想像的という区別は、[a] から [b] への移行も次のおり説明できるように思われる。人間精神が人間身体の変状によって自己 [=人間身体の観念] を観想するとは、観念の原因性という点からいえば、人間身体の変状の観念が人間身体の変状の観念の原因だと表象することに他ならない。この点においては、人間身体の変状の観念は人間身体の変状の観念の活動性 (コナトゥス) と合致している。というのも、人間身体の変状の観念は非十全にはあれ、人間身体の変状の観念によって産出されたからである。ところが、本来であれば、本稿の第1節で確認したように、外的物体の観念もまた、人間身体の変状の観念の原因である。

しかし、ここであたかも人間身体の観念のみが人間身体の変状の観念の原因であるかのように表象するとしたら、どうなるだろうか。もし人間身体の観念がより十全に人間身体の変状の観念の原因であると表象するとしたら、人間身体の変状の観念はより多く人間身体の観念の活動性(コナトゥス)と合致することになる。この合致の増大こそが「喜び」である。というのも、第1節で見たように、自己の活動性をより大きく捉えることから喜びが生じるからである。それゆえ、マシュレのように現実的／想像的という区別を考えるならば、精神が現実的に喜びを感じるとしても、人間身体の観念がより十全に人間身体の変状の観念の原因であるという点は、表象において捉えられるかぎりであって構わないのである。

しかし、ここで新たな疑問が生じる。人間精神はいかにして外的物体の観念を度外視して、人間身体の観念のみに注視するのだろうか。マシュレは定理 53 系がそれを明らかにすると述べるが、この系はむしろ定理 53 を「人から賞賛される」という実践的な場面に適用するものである。これについては、マトゥロンの方が見事に示唆に富んでいる。

マトゥロンは定理 52 の役割を重視し、そこで論じられる「驚き (admiration)」が、自己への注視を可能にすると考え (Matheron 1969, 216)¹⁵。「驚きとは、ある事物の個別的な表象 (singularis imaginatio) が他の表象といかなる連結ももたないために、精神がその表象に釘付けにされたままの状態になるような、そうした何らかの事物の表象である」(E3AD4)。驚きはそれ自体感情ではなく、精神を釘付けにするような表象である。人間精神は、人間身体の観念のうちに、外的物体の観念にはない何らかの個別的な特質を見いだすと、外的物体の観念ではなくむしろ人間身体の観念へと釘付けにされる。これによって、外的物体の観念と人間身体の観念のどちらをよりいっそう表象するかという比較の次元へと投げ込まれる。定理 53 の後半で、「より判明に」と比較級で表されていた事態がこれである。それゆえ、「自己を観想する」とは、人間身体の観念への驚きから、外的物体の観念よりいっそう人間身体の観念を表象することに他ならない。

このように、マシュレとマトゥロンの解釈を組み合わせると、自己の観想から生じる自己充足が可能になるのは、驚きによる自己への注視を通して、自己が外的物体との比較の次元に投げ込まれるからである、とすることができる。

4. 能動的な喜びとしての自己充足

人間精神は理性や直観において十全な観念をもつが、「観想から生じる自己充

足」はこの十全な観念から生じる能動的な喜びの根拠にもなっている。ここに、自己充足に含まれる自己知の第三の相が見られる。本節では、これがどのように自己知と関わるのかを見ていきたい。能動的な喜びと欲望を扱う第 3 部定理 58 証明から、能動的な喜びに関わる部分を引用しよう。

[a] 精神は、自己自身と自己の力能を思い抱く (*concipere*) 時に喜ぶ (この部の定理 53 より)。[b] ところで、精神は真なる観念、つまり十全な観念を思い抱く時、必然的に自己自身を観想する (第 2 部定理 43 より)。[c] しかるに、精神は何らかの十全な観念を思い抱く (第 2 部定理 40 備考 2 より)。
[d] ゆえに、精神は十全な観念を思い抱くかぎりにおいても、つまり (この部の定理 1 より) 能動であるかぎりにおいても喜ぶ。(E3P58D、[a] ~ [d] の記号は引用者による)

この箇所全体は三段論法になっている。まず、大前提として [a] において「観想から生じる自己充足」の定義が導入される。次に、小前提として [b] と [c] で、(1) 精神が十全な観念を思い抱く時に必然的に自己自身を観想すること、(2) 精神が実際に何らかの十全な観念を思い抱いていることが示される。それらから、結論として [d] が帰結する。

ここで問題となるのは、次の 2 点である。一つは、[b] で言われる自己知がどのような事態であるかという点である。[b] で参照される第 2 部定理 43 では次のように言われていた。「真なる観念をもつ者は、同時に自己が真なる観念をもつことを知り、かつそのことが真理であることを疑うことができない」(E2P43)。ここでいう「自己が真なる観念をもつことを知る」ことは、「自己自身を観想することとどのように関わるのだろうか。両者の間には表現上の開きがある。

もう一つは、[b] における自己知が [a] における自己充足の定義に適用できるのかという点である。確かに [a] は第 3 部定理 53 から導入されているが、われわれが前節で試みた解釈では、この定理は人間身体の変状の観念を介する非十全な認識において理解された。それゆえ、上記の証明のように、十全な観念から生じる喜びの場合は、事情が異なるはずである。

以上の二つの疑問について、第 2 部定理 43 に戻って考えてみたい。定理 43 では、先に引用したとおり、人間精神が真なる観念をもつ時、必然的に自己が真なる観念をもつのを認識することが示されていた。この定理の証明にとって重要なのは、証明の前提となる「真なる観念」の規定である。証明のはじめでは次のよ

うに言われる。「われわれのうちにある真なる観念は、人間精神の本性によって説明されるかぎり、神のうちで十全な観念である」(E2P43D)。つまり、人間精神がもつ真なる観念は、人間精神の本性のみから導出される十全な観念である。ここで、「人間精神の本性のみから導出される」という規定が、人間精神が表象においてもつ非十全な観念の場合とは異なっている点に注意したい。この規定があるからこそ、人間精神がもつ真なる観念についての認識(真なる観念の観念)もまた、人間精神の本性から導出されることになる。定理 43 では、これによって人間精神が必然的に「自己が真なる観念をもつ」という認識を得ることが示される。

「人間精神が真なる観念をもつ」ということは、観念の原因性という観点から見れば、「人間精神は真なる観念の十全な原因になっている」といえる。というのも、真なる観念は人間精神の本性のみから導出されるため、人間精神とは別の外的原因がないからである。したがって、「自己を観想する」とは、人間精神が真なる観念の十全な原因となっていることを認識することに他ならない。言い換えれば、人間精神の活動性(コナトゥス)のみによって、真なる観念が産出されるのを認識することである。この場合、この真なる観念は人間精神の活動性と必然的に合致するため、人間精神は自らの活動性をより大きく捉えることになる。ここで、自己充足としての喜びが生じる。

それゆえ、「自己を観想することから自己充足が生じる」とはいつでも、非十全な認識の場合とは、自己知と自己充足の関係は異なっている。十全な観念から生じる自己充足の場合、十全な観念をもつことから必然的に自己知が生じ、自己充足が感じられる。ここにおいては、われわれが前節で導入した現実的／想像的の対も、驚きによる自己への注視も想定する必要がない。第3部定理 53 で導入された「観想から生じる自己充足」は、定理 58 において、非十全な観念の場合とは異なる相の下で捉えられるのである。

5. 結論

以上で見てきた自己充足に含まれる自己知の三つの相をまとめておこう。第一の相では、社会的な場面において、自己の行為を認識することから自己充足が得られた。第二の相では、驚きによる自己への注視によって、自己が外的物体との比較の次元に投げ込まれることから、自己を観想することのみを通して自己充足が得られた。第三の相では、自己の精神が十全な観念をもつことから必然的に生じた自己の観想によって、前の二つとは異なる能動的な自己充足が得られた。

これら三つの相は、『エチカ』第4部で描かれる、社会の中で捉えられる感情と理性の関係と深く関わっているように思われる。このことを明らかにすることで、『エチカ』がアウグスティヌス主義の文脈の中でいったい何を企てようとしたのかに迫ることができるだろう。

本研究は JSPS 特別研究員奨励費（課題番号：15J09245）の助成を受けたものである。

¹ *acquiescentia in se ipso* という表現は、近世特有のラテン語表現であり、1650年に刊行された『情念論』ラテン語訳で「自己充足」を意味する *satisfaction de soi-même* の訳語として用いられたのが、最初期の例だと推定される（Totaro 2009, 1-3）。デカルト自身が書いたラテン語著作では、*acquiescentia* という名詞形は見当たらないため、スピノザはこの『情念論』ラテン語訳から、*acquiescentia in se ipso* という表現を受け継いだと推測されている（Bunge *et al.* 2011, 142）。

² 人間精神が自己自身を認識するという事態を精確に説明するには、「観念の観念 (*idea ideae*)」(E2P21S) という次元を想定しなければならない。というのも、直後に論じるように、人間精神自体が「人間身体の観念」であるため、人間精神が自己自身の観念をもつということは、「人間身体の観念の観念をもつこと」になるからである。「観念の観念」という発想は、初期著作『知性改善論』にまで遡れるが、以降の論述に直接関わらないため、ここでは深入りしない。

³ Gueroult 1974, 235-44. ドゥルーズも同様の解釈をしている（Deleuze 1981, 105-9）。

⁴ 例えば、以下の箇所における「対象」という語は、明らかに自己以外のものを念頭に置いている。「われわれがかつて他のものと同時に見た対象や、多くのものと共通なものしかもっていないとわれわれが表象する対象は、ある独特なものをもつとわれわれが表象する対象ほどは、われわれは長い間観想することはないであろう」（E3P52）。

⁵ cf. 「諸観念の秩序と連結は、諸事物の秩序と連結と同じものである」（E2P7）。

⁶ 「十全な原因」と「非十全な原因」は、以下のように定義される。「ある原因の結果がその原因によって明晰判明に知得される場合、私はその原因を十全な原因 (*causa adaequata*) と呼ぶ。他方、ある原因の結果がその原因のみによっては知解されえない場合、私はその原因を非十全な原因 (*causa inadaequata*) ないし部分的な原因 (*causa partialis*) と称する」（E3Def2）。

⁷ cf. 「精神は明晰判明な観念 (*idea clara et distincta*) をもつかぎりにおいても、錯雑した観念 (*idea confusa*) をもつかぎりにおいても、ある無限定な持続において、自己の存在を保持しようと [いうコナトッスを有] し、またこの自己のコナトッスを意識する」（E3P9）

⁸ 「喜び」と「悲しみ」の定義は以下のとおり。「喜びとは、人間がより小さな完全性からより大きな完全性へと移行することである」「悲しみとは、人間がより大きな完全性からより小さな完全性へと移行することである」（E3AD2, AD3）。

⁹ Rutherford 1999. および Totaro 2009, 1-15.

¹⁰ 「内的原因の観念を伴った (*concomitante idea causae internae*)」の部分、OP版とヴァチカン草稿では「外的原因の観念を伴った (*concomitante idea causae externae*)」となっている。ここでは、グプハルト版に倣って、「内的原因の観念を伴った」に訂正して読む。訂正する根拠の一つは、NS版で「内的原因の観念を伴った (*van het denkbeeld van een inwendige oorzaak verzelt*)」となっていることであり、もう一つはE3P51Sで自己充足／後悔を「原因として自己の観念を伴った喜び／悲しみ」と定義していることである。

¹¹ 本性の類似性もまた表象において捉えられたものにすぎない。人間は自分と似ていると表象する他の人々については感情を模倣するが、自分と全く似ていないと表象する人々に対しては、感情を模倣することはない。

¹² 自分が他の人々から賞賛される時に感じる喜びは、のちに観想から生じる自己充足の例として再び取り上げられる（E3P53C）。それゆえ、「行為」と「観想」は、常に截然と区別できるとは限らない。

¹³ したがって、教会の教条に盲目的に従うかぎり、たとえ善行を行うとしても、自己充足を享受することはない。このことをスピノザは自らの著作の中で明示的に論じることはないものの、特に『神学・政治論』を解釈する上では、一つの重要な鍵になるように思われる。

¹⁴ このことは、『エチカ』において「受動的な喜び」をどう理解するのかという点と関わっている。受動的な喜びは、非十全な観念から生じるにもかかわらず、なぜわれわれの精神にとって善である、すなわち認識に役立つといえるのだろうか。LeBuffé (2009, 211-8) は二つの可能性を挙げる。(1) 確かに受動的な喜びは認識に役立つが、人間身体の全体ではなく部分にしか関わらないゆえに非十全で受動的である。(2) 受動的な喜びは、われわれの認識を阻害する悲しみと対立するという意味で、間接的に認識の役に立つ。しかし、この説明は不十分である。というのも、(1) はむしろ『エチカ』では身体的な「快感」と精神的な「快活」の違いを説明する論理であり、(2) については、「情欲 (libido)」のように、対立する感情がない受動的な喜びがあるからである。受動的な喜びを理解する時も、むしろここでわれわれが見るように、現実的／想像的の対を想定すべきである。受動的な喜びは、確かにそれ自体で十全な認識を生むわけではないが、われわれが認識に役立つと「表象する」かぎりにおいて、現実的に「喜び」となる。受動的な喜びの基礎もまた、表象において捉えられたかぎりのものでしかないのである。

¹⁵ マトゥロンは、『エチカ』第3部定理4-57について、定理52の前で大きく区切り、定理52-57をひとまとまりと考える。このまとまりでは、定理52で導入された「驚き」によって、「自己への注視」という観点から、定理51以前の議論を展開し直しているとする (Matheron 1969, 616-7)。それに対して、マシュレは「驚き」に大きな役割を与えていない。定理52の前で大きく区切るのではなく、むしろ定理48-57を一つのグループと考えている (Macherey, III, 412)。

[凡例]

スピノザの著作からの引用は、下記のゲプハルト版を用いた。また必要に応じて、ラテン語遺稿集 (OP版)、オランダ語訳遺稿集 (NS版)、ヴァチカン草稿も参照した。

Spinoza Opera, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften (4 vols.), hrsg. von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winter, 1925.

Opera Posthuma, [Amsterdam, Jan Rieuwertsz], MDCLXXVII (1677).

De Nagelate Schriften, [Amsterdam, Jan Rieuwertsz], MDCLXXVII (1677).

The Vatican Manuscript of Spinoza's Ethica, Leen Spruit & Pina Totaro (eds.), Leiden, Brill, 2011.

『エチカ』(略号: E) からの引用の表記は、慣例にしたがって下記の略号を用いて表した。例えば、『エチカ』第2部定理16系2はE2P16C2、『エチカ』第3部「諸感情の定義」第25項はE3AD25と記した。

P = Propositio (定理) D = Demonstratio (証明) C = Corrolarium (系) S = Scholium (備考)

Def = Definitio (定義) Ex = Explicatio (説明) AD = Affectuum Definitiones (諸感情の定義)

[参考文献]

Bunge, Wiep van, and Henri Krop, Piet Steenbakkens, Jeroen van de Ven (eds.). 2011. *The Continuum Companion to Spinoza*, Continuum.

Deleuze, Gilles. 1981. *Spinoza : Philosophie pratique*, Minuit.

Gueroult, Martial. 1974. *Spinoza II : L'âme*, Aubier-Montaigne.

LeBuffé, Michael. 2009. "The Anatomy of the Passions," in *The Cambridge Companion to Spinoza's Ethics*, Olli Koistinen (ed.), Cambridge University Press, 188-222.

Macherey, Pierre. 1994-2001. *Introduction à l'Éthique de Spinoza* (5 vols.), PUF.

Matheron, Alexandre. 1969. *Individu et communauté chez Spinoza*, Minuit.

Rutherford, Donald. 1999. "Salvation as a state of mind: The place of acquiescentia in Spinoza's Ethics," *British Journal for the History of Philosophy*, 7(3), 447-73.

Totaro, Pina. 2009. *Instrumenta mentis: contributi al lessico filosofico di Spinoza*, L.S. Olschki.